



特234
130

始



始



特 234
130



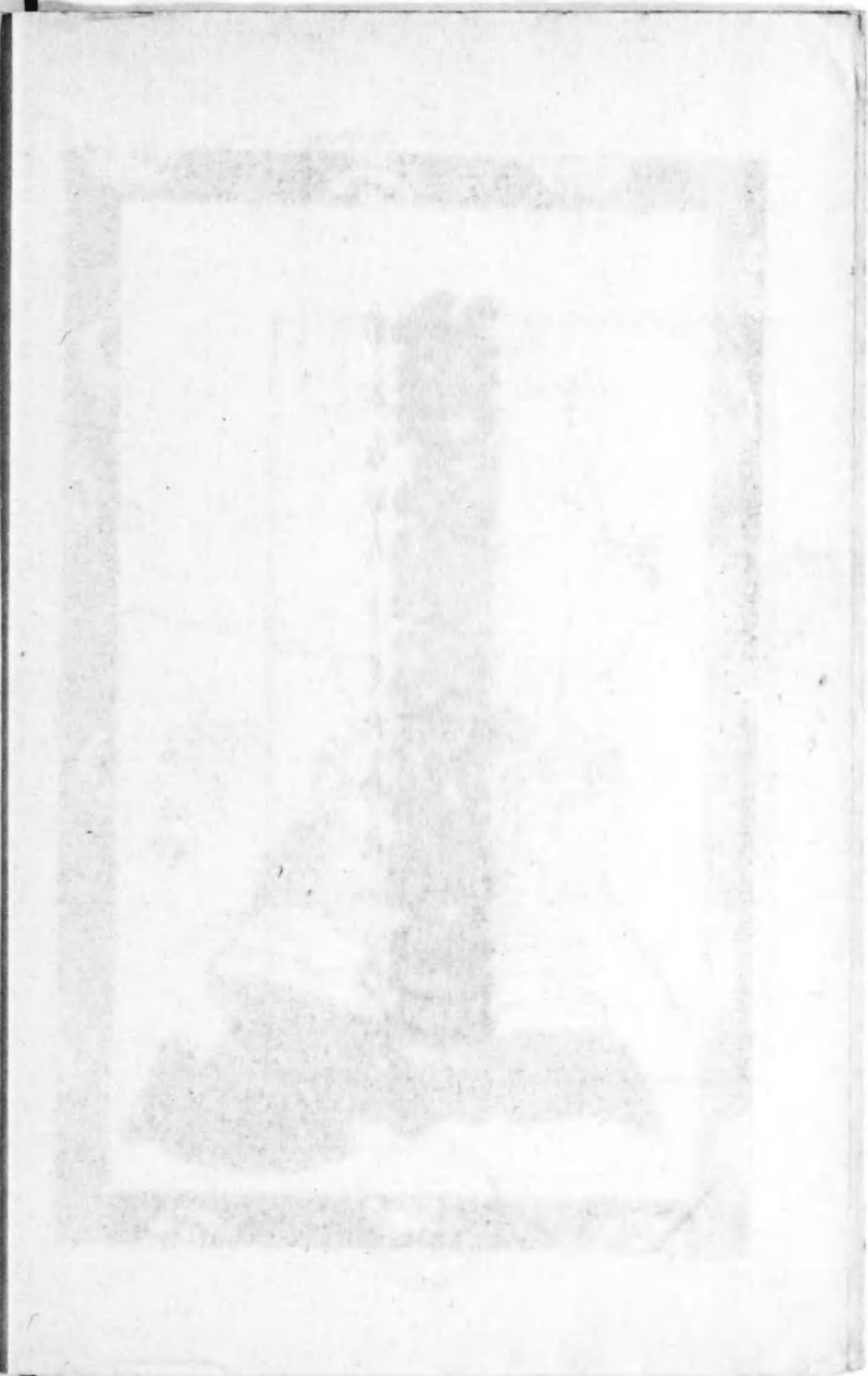
近江源氏先陣館
和野 24911 せん せん せん せん せん



近江源氏先陣館

目次

四斗兵衛住家段	一三
同 註釋	二一七
○ 近江源氏先陣館筋書	一七
挿 繪	
和田兵衛秀盛(清忠筆)	





解附義太夫名曲全集
稽古本

近江源氏先陣館
あふみ げんじ せんぢん やかた

四斗兵衛住家段
しと びやう ずか の だん

道へ立歸る跡に夫婦が氣もいそぐ、
『コリヤ鼻よ、きつう競口がよふ成てきたわい。コリヤまあ
ちつとお神酒でも上げぬかい』

近江源氏先陣館

『アノたつた今禁酒じやといふて最早かいの』

『ほんにな其禁酒をとんと忘れた程にの、ハ、、、。したが呑付た酒呑ずに居たら気がつきてたまるまい。イヤおれが氣のつきよりお姫様が、ア嘸御退屈にござりましょ、お慰みに酒の粕なと買って来てしんぜぬかい』

『オ、嗜ましやんせ何のあなたへそんな物御不自由も暫しの中、やんがてあなたの思し召戀人様に逢坂山の眞葛人に尋ねてついお出でござりましょ』といさめ申せば時姫も、

『よしなき戀にからまれて、我身斗か片岡に、苦勞かけるも自らゆるゑ夫婦の手前恥かし』と顔は照葉に置く露の袖にひた

せる有様に、おまきも詞涙ぐみ、暫しいらへもなかりけり。折から来る鹽賣が、上下ため付酒樽を肩にぶら／＼足音の中にもしやおまきが氣轉誰見咎めても大事のお身見苦しけれど奥の間へと、女房にいざなはれしづ／＼立て入り給ふ。表に鹽屋がとんきよ聲、

『駕籠昇の四斗兵衛殿とは爰でござんすか』とずつと這入つて顔と顔、

『オ、こなさんが四斗兵衛殿かい、終に逢ふた事も又近づきでも、内儀様は留守でござんすか』

『ア、鼻は内に居ますが、貴殿マアどつからござつた』

『イヤおりや鹽賣の長藏といふ者でござんすが、ア、鹽商賣も身の廻りにはり込で合ふこつちやこんせぬはいの、それでもとでの入ぬ駕籠舁がしたさに弟子に成に來やんした、マア近付の爲少分ながら此一樽寢酒に吞で下され』と、酒樽直せばにつこり笑顔。

『ハ、ハ、ハ、こりや忝ない、酒さへ貰へば何處からでもよふござつた。したが駕籠舁の弟子入に上下とは、ア、裸で茶の湯に行裏じやの。そしてこりやきつい氣のはり様じやが、是もまた水じやないかや』

『ハテそんなじやない、小半酒や八文酒吞だ口には、ちつと重

ふて吞にくからふ、次酒でもないこりや鎌倉山』

『ヤ何と』

『サア鎌倉山といふ大切な名酒じや程に、へ、味はふて吞でもらひましよかい』

『ム、ムン吞ましよ、いかにしても言様が面白い、又此の四斗兵衛が吞からは鎌倉山でござらふが、富士の山でござらふが、譬へ日本國でもコレ此茶碗に引受て、いでと思はゞぐつと一吞、マア試みに一ばい致そ』と、樽の口からどぶくく、お辭宜なしに下されると引受けくつ、け吞。

『こりや見事、さらばお肴仕らふ』と、蕪苞とりて金作。

『太刀魚の作物、鹿末ながら』とさし出せば、

『ム、こりやお肴が肉過て、我等ちつとたべにくい、此肴はお預け申さふかい』

『イヤお辭宜には及ばぬ、太刀魚よりはコレ此鎗の尖、噛こなした齒ぶしの丈夫、適四海の軍師、サ酔狂人と見極めてのお肴、受けてすつぱり切てもらひたい』

『ム、切とは何を』

『時姫の首』

『ヤ』

『たつた今かくまはれた時姫、其首がもらひたい、ガよもや貴』

様得きるまいの』

『ソリヤ何より安い事切てやろく、何のおれが首じやなし、人の首の一ツや二ツ望なら目の前で』と又引受けてどぶく。

『然らば肴も』

『ハテ志じや戴こかい、時姫の首、夫も合點切てやろ』と、初の心酒故に打てかはつた詞詰、一曲者としられたり。始終一間に聞居る女房走り出で、

『コレ四斗兵衛殿、兄様に詞つがふたこなたの出世、知行取に成る事も酒で忘るゝたわいなし、いかに酒に酔た逆、お姫様の

首切とはあんまりな人でなし、コレそこな人、酒の酔を相手にせずと、とつと、逝でもらひましょ』と聲ふるはして腹立つ女房。夫は酒に廻らぬ舌つき、

『ヤイ、ソ、そげめ、知行くくとぬかすが、何の五萬石や十萬石、此酒にかへらるゝ物かい、それで時姫の首討てやるが、ナ、何とした』

『ム、すりや何うあつてもお姫様を切る氣じやの』

『オ、切る』

『それ聞たらもふ爰には置まされぬ、わしが供して兄様へ手渡しする』と、一間へかけ入りかひくしく、姫の手を取り立

出る、盡せぬ縁か見合す顔、ノウなつかしや戀しやと立寄る姫を、抜打に、首は前にぞ落にけり。ハア、はつとお櫛が氣も半亂。鹽賣つゝ立ち、

『オ、適れ四斗兵衛出かされたりと、言捨てこそかけり行く。跡に女房が聲を上げ扱もくいたはしや、お命を助る爲心を碎て兄様が爰迄預けに見へた物、其時つれなふ預らずば、かういふ事は出来まい物、佛頼んで地獄の牛頭馬頭もし今にても兄様がお迎ひに見へたらばわしやいひ譯がないわいの、いつそ殺してくと、夫に取付しがみ付恨歎けばころりとこけ、前後もしらぬ高駈。斯共しらず片岡が禮儀の上下折目を糺し、

御迎ひの乗物つらせ悠々と戸口に参み、

『ヤア家來共言付け置し物此家へ持参し案内せよ』と詞につれ衣服大小白臺にかゝやく兜は龍頭傍狹しとならべ置片岡しづ／＼内に入り、

『誠に雷の落くる急難事ゆるなく相濟し故早速姫の御迎に参上せり是と申すも四斗兵衛殿御かくまひ下されし故助かるまじき姫の命助かりし命の親直に鎌倉へ同道致し時政公へ御目見へ契約の通り只今より武士に取持つ印の音物御受納あつて姫諸共御出達下さらば此上の悦びなし』と慇懃に述べれば女房有にもあらぬおもひ兄が脇指抜取て自害と

見ゆるを片岡押へて、ハテ心得ぬ此有様と、刃物もぎ取り眼を配り、

『ヤこりや是時姫君の御死骸何者が手にかけてし、ア、しなしたり／＼と齒を喰しはる怒の面色、

『妹が行跡扱は四斗兵衛めが所爲よな儕下郎め主君の敵一分だめし』と切付る。心得むつくとおき上れば、いらつて切込む刀は稻妻、こなたの早足は飛鳥のかけり、勢ひ爰に龍頭の兜を片手に引つかみ、一間をさしてかけ込だり。

『ヤア卑怯者逃る速逃さふか』と、つゝいてかけ行く向ふに妹、

「オ、お腹立は理り至極酒故亂る、心をしり、かくまふたは私が科夫よりマア先へ私を殺して下さんせ、さうない中は奥へはやらぬ」

「マア邪魔ひろくなと引ずり退け、かけ行く鎧に又取付き、やらじ放せとあらそふ最中表の方に大音上げ、

「江州醒井の住人和田兵衛秀盛殿御用意よくば坂本の城へ御入城三浦介義村御迎ひに伺候せり」と呼はる聲は以前の鹽賣始めには似ぬ勇士の出立せきにせいたる片岡も様子いか、と猶豫居る。女房不思議立向ひ、

「坂本の城へ誘はんとはいつ味方させ、いつの契約殊には隠

す夫の本名和田兵衛秀盛とは」

「ホ、陳平韓信が腸をさぐり市人に姿をやつし隠されても美名は四海にかんばしく宇治の方の仰を請け、何卒して味方に招き、雌の劔授けんと姿をやつし徘徊すれ共、元來面體見知ぬ某いか、と心を碎く中、中仙道にて不思議に出合ひ、我姓名を記したる手槍をもつてためせし手練、和田兵衛ならで外に及ばぬ稀代の手の中、何卒味方に頼まんと思へど、手寄る術なく、いか、と案じる時も時、時姫をかくまはれし是幸と此家に來り、首討て渡されよと渡せし劔は雌の劔、我心を推量有しか、事故なく受けられしは、味方に加はる印のわり印、此上は片時

も早く打立ち給へ御供せんと高らかに呼はつたり。片岡聞
くより猶もせき立ち、

『ヤア京鎌倉と引わかるれば、われは鎌倉時政方京方のやつ
原一人も生置れず、其上眼前姫の仇、いつく迄もとかけ行く一
間隔の戸障子踏ひらけば、内に四斗兵衛悠々と、どてらにかは
る肌着の小具足唐縫したる陣羽織に、十王頭の小手脚當太刀
と兜を兩の手に、床几にかゝる有様は、實百萬騎の軍師ぞと骨
がらゆゝしく見へにけり。和田兵衛兜を座前に直し、

『いかに片岡時姫の身にかはり殺されし其娘は、定めて貴殿
の息女ならん、いたはしさよと悔みの詞。』

『ム、すりや某が娘と知て』

『ホ、、、、、敵の氣を見て士卒をつかふ此和田兵衛、いは
んや一人の女童、いか程に偽ればとて、親子の親しみ上下の人
相、一目にも見違ゆべきか。頼家公に縁邊は切れたれ共、不義
の科有る時姫君、それ故娘を身がはりとし、時姫の心の儘三浦
之助に添せんと心を碎く片岡殿、其忠義を感じ入、不便ながら
殺害致せば、時姫といふ名はきえて、今は憚る所なし、御迎ひの
乗物に、忍びまします時姫君、早々是へ』

と、和田兵衛が詞に片岡陳じもならず表の方、乗物明れば時
姫君、こけつ轉びつ住の江が、死骸に取付すがり付、親の赦さぬ

戀路故豫てなき身と思ひしに、自が命にかはつて死でたもつた住の江、嬉しい共忝ない共、いかで詞も有べきぞ、只うらめしいは造酒五郎、かく成事を露程もなどし、らしてはくれざりし、しらばやみく、此人を、殺すまい物あちきなやと、恨かこちの涙川袖に淵なすばかり也。

『ヤア、住の江とは紛らはし、其の死骸は時姫君、さいふ汝が我娘、ナ御合點が参つたか、親に勝つた娘が忠義、犬死さして下さるな』と目をしばだく、片岡が心を察して、妹は三浦介に打向ひ、

『時政公の御息女といへば、添れぬ敵味方、兄様の娘御に何の

障りも味方同士、申御了簡は』といふを打けし、

『ヤア、味方とは穢らはし、鎌倉方へうら返つたる不忠侍、其娘に何の縁組、某に心を寄せし時姫君、首討れよと望みしも、敵の縁に引れぬ潔白、是非時姫を娘とし、此三浦へ送りたくば、掣引出には、汝が首、覺悟せよ』と詰寄れば、

『ヤレ、早まられな三浦之介、命を捨て名を上るは誰しも武士の好む所名を捨て、忠義を立る造酒五郎、其證據こそ此兜、是こそ將軍宣下の御寶、警頼家軍に打勝ち、四海残らず押領有ても、此兜なき時は、將軍宣下思ひもよらず、そこをはかつて片岡が、鎌倉方へ重返り、不忠の名をとられし故、念なふ兜を奪ひ取り、

某に渡されしは、名を捨て忠義を立る古今の忠臣、此兜手に入るからは、これより坂本の城へ馳むかひ、鎌倉勢とわけめの軍、たとへ時政何萬騎に馳向ふ共、宇治勢田に砦をかまへ、變に應じて氣に乗じ、あるひは顯はれ、或は隠れ、千變萬化によせ手をなやまし、大將に舌をまかせんは、此和田兵衛が方寸に有り、心安かれ方々」と、居ながら謀る軍師の軍配、

「ホ、驚き入たる秀盛の明智か、る軍師味方に有れば、軍の勝利疑ひなし、我は有ても益なき臣、今こそ三浦の望にまかせ、聲引出進上せん」と、言ふより早く、差添腹に突立れば、ノウ悲しやと、姫妹、すがり歎くを押退け、突退け、

「京方には誰々と、指折の数にも入し某が暫くにては、鎌倉へ裏返つたる其悪名、何をもつてか雪ぐべき、味方の内にも追蹤表裏の大江の入道、それがし再び城に歸らば、豫々より鎌倉へ、内通したる事共の、顯はれん事身の大事と、いかなる非道謀計をもつて、味方の心を迷はさば、區々なる人心、我疑へば人疑ふ、人氣和せざる其時は、軍の勝利思ひもよらず、そこを思ふて此切腹、死後にも片岡は、返り忠せし不忠の臣と、末代に名は穢す共、一心五臓に忘れぬ忠義、何卒名有る軍帥を、御味方させん物と、心あてどは、和田兵衛殿妹が連そふと、聞しは、幸住所を尋ね、我志を立てん事、此人ならでと、娘を誘ひ、存念を立てたる某、

妹悔むな時姫君もお歎きなく御身にかはる娘めが志を立て
 へたべ不便やお主の爲と聞き悦ぶ事は悦びしが逆もの事に
 男の子に生れたら戦場の一大事御馬先の御用に立て名を上
 る討死したら父上迄お嬉しかるが女子の身のふがひなさと
 様こらへて下されといふ時は出かしたと譽る事さへ胸
 にせまり一言一句も出なんだに親にまさつて先に立ち親は
 後れて歩む足此家へ来る道々の堅牢地神の頭には、無片岡が
 踏む足が大盤石と答へやせん重き忠義にかへたる娘よふ死
 てくれたな出かしたと鍛ひにきたひし忠義の體も子故の輔
 に吹立られむせぶ涙は熱湯の湯玉とばしる如くなり。妹は

正體泣沈み

『よく／＼薄い兄弟中、たつた一人の姪子にも名乗合もする
 事か、はかないわかれ悲しやと、歎けば俱に時姫君、

『とても添れぬ敵同士、疾からわしが死ならば、かうした憂目
 は見まい物、どうぞ添たい／＼と未練な心の迷ひから、親子の
 衆の此最期、コレ堪忍してたもいのふ思ひ切ふと思ふても、儘
 にならぬが戀路の因果、難命死後れ、面目ない恥かしい叶は
 ぬ戀をあきらめて、此身の果は尼法師、それがせめての言譯ぞ
 やと、身をうら菊の兩袖に、たもちかねたる露涙、親子の爲の香
 花ぞと、兜を時の香爐にくゆらす煙蘭奢待、東大寺の寶物なれ

ば、佛縁にいざなはれ、未來の佛果と合す手に、又も涙の珠數の玉、こは有がたき御手向、娘も我も成佛得脱、只此上は三浦之介へ媒介頼む和田兵衛殿』

『オ、其義はちつ共氣づかひ有るな』

と、兜をとつて三浦に向ひ、鞆引出と望みし首、此兜ゆへ命を捨し片岡なれば、一身五體は兜に残る、是を引出に姫の事、氣づよき斗武士とは云ぬ、コリヤ情も武士の道具ぞ』と渡せば、取て三浦介、

『此上何か辭退せん、さはいへ勝利を得る迄はお預け申すおまき殿。家を出る時妻子を忘れ、戰場に及んで身を忘るゝは

勇士の道若も運つき頼家公御大事とならん時、これ此の龍頭の兜を着し、君にかはつて討死せん、名香かほる首取しと云ふ、さた有らば、此三浦が討死せしと知り給へ』

と詞は末に逢坂や關の清水と湧かへる、涙ながらのいとま乞、放れがたなき初戀に、ほだしは見せぬ若武者を、伴ひ出る軍の首途、うらやましげに延あがり、見おくる手負を介抱し、俱に見送る、姫女房戀と無常を見捨行く、武士の道こそ是非もなき。

四斗兵衛住家段註釋

〔競口〕 景氣。「——がよう成つて来た」とは運が向いて来たと言ふやうな意味。

〔まあちつと〕 もう少し。まちつと。「——お神酒でも上げぬかい。」

〔あなた〕 あのお方。身分のある人に對する敬語。「何の——へそんな物。」

〔眞葛〕 さねかづら。野生の蔓草で田舎家の生垣などに能く見受けらる。本文の件には格別意味はないのだが、古歌に「逢坂山のさねかづら人に知られて来るよしもがな」といふ句があるので、それを採つて「逢坂山の眞葛人に尋ねて」ともじつたのである。それに眞葛は「美男かづら」といふ異名もあるので、姫の戀人である三浦介を利かした積りかも知れない。

〔はり込〕 金のかゝること。「身の廻りがはり込で」とは服装に金がかゝるといふ事。

〔小半酒〕 こなから。こなから酒。半は一升の半分で五合、その半分の二合五勺を「こなから」といふのである。また少しばかりの酒をも「こなから」といふ。

〔八文酒〕 安い酒のこと。

〔肉過ぎ〕 分に過ぎた馳走。「お肴が肉過ぎて。」

〔知行取〕 知行所を持つてゐる侍。又は俵祿、扶持を受ける人。武家時代に、武士が賜つて領してゐる土地を知行所といふ。

〔折目を糺し〕 衣服の着崩れもなく、上下をキチンと着てゐる事。

〔白臺〕 白木の臺。

〔龍頭〕 龍の頭を作つて兜の頂の飾にする。龍頭の兜などは大將軍でなければ被らない。

〔しなしたり〕 や、しまつた！

〔陳平韓信〕 漢の高祖に仕へた智謀軍略に勝れたる人。「陳平韓信が勝をさぐり」といふのは此の二人に劣らぬ程の器量を持つてといふこと。

四斗兵衛住家段註釋

〔宇治の方〕 大阪方の淀君を指す。この淨瑠璃の中の「坂本」といふのは大阪のこと。頼家といふのは秀頼のこと。「鎌倉三代記」「近江源氏」いづれも豊臣と徳川との合戦を題材にしたものであるが、作者は幕府を憚つて舞臺を鎌倉時代にしてあるから、その作中の人物も更名を用ひてある。

〔唐縫〕 刺繍。「——したる陣羽織。」

〔十王頭〕 小手脚當の頭に十王の像が取付けてあるのを十王頭の小手脚當といふ。十王とは佛經に、冥府にゐる十人の王のことで、死んだ人は總てその一人／＼の裁きを受けると云はれてある。

〔大江の入道〕 大野道犬のこと。其子修理と共に秀頼の左右に侍して權勢を恣まゝにした人。

〔堅牢地神〕 佛敎の中にある二十諸天の一つ。大地を守る神。

〔蘭善待〕 奈良正倉院に藏められてある名香の名。聖武天皇がお附けになつた名前である。

〔東大寺〕 奈良にある華嚴宗の總本山。本尊の盧舍那佛といふのは名高い大佛のことである。

〔佛果〕 現世で行つた業の報いによつて、あの世へ行つてから成佛の果を得ること。

〔成佛得脱〕 發心の功德によつて佛になること。

〔ほだし〕 馬の脚を繫ぐ繩。妻子などの恩愛に心を絆がれて物事の自由にならぬをいふ。三浦介は時姫のために心を引かれるやうな未練らしい素振は見せなかつた。

稽古本附義太夫名曲全集

近江源氏先陣館

解説題

この淨瑠璃は明和六年十二月の作で、竹本座に上演されたものである。作者は近松半二、八民平七、三好松洛、竹本三郎兵衛である。通し九段であるが、四斗兵衛住家段は其の六つ目である。近年は殆ど舞臺に出た事がない。たゞ八つ目の「盛綱陣屋段」のみが古典劇として歌舞伎芝居の火物になつてゐる。六つ目の方は興行も狭し、變化にも乏しいから、それで語り物としてのみ残されたのであらう。大體の筋は鎌倉三代記と同じく、大阪方と關東方との合戦を主材としたもので、人物の配合までが全く同じである。四斗兵衛は後藤又兵衛、片岡造酒頭は片桐市ノ正、三浦介は木村長門ノ守である。

近江源氏先陣館

四斗兵衛といふ大酒呑の駕昇があつた。骨の太い、軀の巨きな、見るから強さうな男であつた。女房をおまきと云つて、人柄な女であつた。それも其の筈、この四斗兵衛こそは江州醒ヶ井の住人と田兵衛秀盛と云つて天下に鳴り響いた豪傑であつた。

此時、京方と鎌倉方と事切れになつて、今や天下分け目の大合戦が始まらふとしてゐる。お互に人物の欲しい際であつた。殊に京方では此の和田兵衛を味方に附けたいと思つてゐたが、何處へ行つて了つたものか更に所在が分らないので、頼家の母宇治ノ方の言付けで、その和田兵衛を捜しに出たのは三浦ノ介義村といふ美男であつた。

義村は年も若く、容貌は繪に描いたやうな優しい男であつたが、ナンノ、膽は太く、分別の坐つた、一人當千の英傑であつた。この義村には一つのロマンズが有つた。それは北條時政の息女時姫との戀物語であつた。二人は相思の仲であつたが、かうして京鎌倉と敵味方になつた以上は縁切れと思はねばならないので有るが、一旦思ひ込だ此の戀、何として棄てられよう、

時姫は遂に父を棄て、去つた。時政は片岡造酒五郎をして其の跡を追はしめた。

片岡造酒五郎は元京方の侍であつたが、佞人の口の端に掛つて、已むなく京を去り、鎌倉へ来て今では時政の腹心となつてゐる。この片岡の妹おまきと云ふのが彼の四斗兵衛の女房なのであつた。

表向こそ鎌倉方にはなつて居るもの、心から寝返りを打つた譯ではないから、矢張京方には同情を持つてゐて、何か好い機があつたら一仕事して面目を取返したいと思つてゐた處へ、時政から姫の事を托されたので、これ幸ひとばかり勇み立つて出かけて来た。

おまきは久し振で兄の片岡に出逢つた。兄は時姫を連れて来て暫く匿つてくれと頼む、追付け迎ひに出るから其れまで大切に預かつて貰ひたい、そのお禮には時政公へ申上げて侍分に取立て、やるからと言ひ置いて出て行つた。

その時姫といふのは眞物では無い。實は替玉で片岡の娘の住の江なのであつた。何故そんな

替玉を使うのかと云ふに、時姫は北條の娘であるから傍で如何に肝煎したからと云つて、兎ても縁を結んでくれる筈はないから、乃で自分の娘を身代りにして、四斗兵衛に首を討たしてやらふ、そして真物の時姫は自分の娘といふことにして三浦との戀を結び付けてやらうと云ふ考へなのであつた。

おまきは自分の姪であるといふ事は知らないから、飽く迄も北條家の姫君だと信じ切つて大切に扱つてゐたが、四斗兵衛の鋭い眼は迅くも其れを見抜いてしまつた。そして節義の厚いのに感じて、こいつ一番、男を立てさせてやれと思つた。

そこへ表の方から素ッ頓狂な聲を立て、入つて来た男がある。この男は鹽を賣つて歩く田舎廻りの商人であつた。「何うも鹽賣渡世は服装に金が掛つて引合はないから、いつそ駕舁に成らうと思ふ、弟子にしてくれ」と云つて酒樽を持つて来た。四斗兵衛、喜ぶまいことか、樽の口からぐびくと呻つてゐる。「これはまたお肴だ」と云つて差出したのを見ると、黄金作りの立

派な太刀！

「こりやア食過ぎて食べられないから」と云つて突き返したが、何うしても受取らない。二人は何か押問答をしてゐるのを立聞して、おまきはハツと思つた。二人は時姫を切るとか切らないとか云ふ相談をしてゐるのであつた。おまきは悔りして姫を連れ出さうとすると、四斗兵衛は躍りかゝつて姫の首を打落して了つた。

それを見ると、件の鹽賣はドン／＼逃出してしまつた。おまきは泣き悲んで夫を責めたが、四斗兵衛は平氣なもので、ごろりと横になつたまゝ高軒をかいてゐる。

おまきは氣が氣ではない、今にも兄が戻つて来たなら何と云つて言譯をしたものかと、おどおどしてゐると、果して供揃ひ美々しく、大勢の家來を連れて、立派な駕籠を釣らせて、姫のお迎ひに来た。また是は引出物であると云つて龍頭の兜を差出した。姫の伴をさして、時政公へ目通りを爲せようといふのである。

と看ると、姫の死骸が横たはつてゐるので、「おのれ、下郎め！」と叫びさま四斗兵衛に切つてかゝる。四斗兵衛はむつくと起上つて、そこに有つた兜を引ッ渡つて奥へ逃げ込んでしまふ。おまきは兄の向ふへ廻つて、自分を先に切てくれと云つてせがむ、二人が争つてゐる處へ、また新たに人馬の音がして、表の方に呼はる聲、

「江州醒ヶ井の住人和田兵衛秀盛殿に見参せん！」

坂本の城から迎ひに來たのだと云ふ。其人は何者であるかと、おまきは表を見ると、それは鹽賣長藏であつたので驚いたのも道理、實は三浦介なのである。三浦介は宇治ノ方の言付によつて和田兵衛の行方を尋ねてゐた處、幸ひに見付け出す事が出來たので暗黙の間に味方をして貰ふ約束が結ばれて、その志に寶劍を渡し、四斗兵衛の方では時姫（身替りではあるが）を打つて二心なき證を示したので、早速坂本の城へ馳せ歸つて宇治ノ方へ其の趣を執達して、一軍の大將として禮を厚うして迎へ取る事になつたのである。

時姫は和田兵衛の執成によつて三浦介と夫婦になる事になつたが、軍の濟むまでおまきに預けて置く事にし片岡は自分の娘の死が役に立つたのを見て喜んだが、今の主人時政と故の主人頼家と双方への義理を立て、腹を切つてしまふ。片岡の持つて來た龍頭の兜は頼家方に取つては無くならぬ寶物で、これが無くては天下に號令する事が出來ない程の大切な品で、それ程の物を取出して來た手柄は、今までの汚名を雪ぐに十分でありますから、もと／＼通り歸參は叶ふ譯であります、何を云ふにも大江入道が權勢を振つてゐて、而も鎌倉方に内通してゐる事を知つてゐるから、きつと睨み合が始まつて、茲に人心の一致を缺く恐れがあるから、寧ろ自分一人の命を捨てた方が宜いと云ふので、何の未練もなく腹を切つて了つたのである。

和田兵衛の出陣が如何に堂々たるもので有りしか。それを羨ましげに見送りつゝ、其の哀れな視線はだん／＼衰へて行つた。

(をばり)

昭和五年八月十三日印刷
昭和五年八月廿二日發行

解説
近江源氏先陣館

不許
複製

編者
玉井清文堂編輯部

東京市神田區表神保町十番地

發行兼印刷者
玉井清五郎

發行所

東京市神田區表神保町一〇
電話神田二三三三番
振替東京三二八番

玉井清文堂

(行印部刷印堂文清)

終

